

無想録 十五 秋

垣根の朝顔、色ようやくあせるころ、秋は静かに、万象の上に歩みよる。

かの堪え難き猛暑も、夕べ一陣の秋風に洗われて、人に蘇生の思いあり、天高くして馬肥ゆるの秋、人はたして肥ゆるや否や。

人肥えたるを尊しとせざるごと、あたかも山高きをもつて貴しとせず、樹あるをもつて尊しとするがごとし。

学ぶことなくして、何の人生ぞや。思惟なく、勉強なく、精進なく、道の行持なくして、何の人の尊貴ぞや。

虫声夜もすがら聞こゆ。夜色沈々として更けるころ、灯下静かに経巻を開く。一字躍り、一句輝く。

われ、真理を求むるにあらず、かれ、われによびかけ、働きかけて、われを無碍の天空にさそい、あるいは千仞の魔谷にさそうのみ。

思い千々にくだけて、ただ、感嘆の声の湧き出づる時、かれ、われにあるか、われ、かれに生くるか、法界ただ寂々として、かれありて名告るのみ。われ生くるにあらず、ただかれ生くるなり。

そこに善悪なく、賢愚なく、美醜、淨穢なく、円融にして無碍なる、光明の大海あるのみ。

ああ。祖聖をして「廣大難思の慶心」と叫ばしめたるもの、これなるか。

悲しみてもなお余りあるは、愛する者の、ただ凡情迷情に悲愁して、かの至尊の声を聞かず、輪廻の身を知らず、ただ宮々として蝸牛角上の小事に囚とらわることこれなり。

尊者大目犍連だいそくけんれん、十余年会わざりし母を訪えば、悲しや母は餓鬼道にありたまいしと。色餓鬼、名譽餓鬼、地位餓鬼、財慾餓鬼。一度彼岸に飛躍して、人間の現実を見れば、大地は所詮餓鬼道にほかならず。

妻を見て泣く夫、夫を憶うて泣く妻、子を見て悲しむ母、母を見て悲しむ子供、ただ目連尊者一人の涙にはあらざるべし。

内省沈々、汝自身を寂光によつて懺愧する者、いくばく。

秋の夜は「汝よ汝にかえれ」と誠むるもののごとし。

唯一絶対なる彼岸の前に合掌して、無限に彼岸に生きんとする。

祖聖のいわゆる「往相廻向」がそれである。

自己を無限に高めんとし、豊かにせんとし、何ものかを求めて、わが精神の滋養とする。この先天的な性を称して、教育家は「自己陶冶性とうやせう」という。

この自己陶冶性は崇たかき文化、絶対価値を思慕してやまず、これ人の人たる特権である。

もし人にして、この主流を退き、文化の予後備線に入らんか、かれはすでに生きることの特権を棄てたる人である。

強烈なる文化的思慕に燃える者のみ、よく教育者たり得ることができる。しかるに何ぞ、教育家にして自己陶冶性を失い、文化的思慕の消滅せる人形の多き。

たとい年齢は三十に満たずとも、かかる人を若老人わかとしよりとよび、老朽とよぶ。生の輝きと、喜びと、尊厳は、この人より去る。

世に天才とよばれる者あり、天才とはただよく精進し努力し、不斷に自己陶冶の火を消さぬ人のことである。

懈怠と放逸と我慢との中より天才生まれたる例なし。未来の天才は今この秋の灯火の下より生まれん。

夏の夜を、浴衣にて浮かれたる者も、秋の夜のもののあわれ、襟を正して声なきの声を聞くや否や。

「合掌。ただ今は激励のみ言葉有難う存じます。沈黙合掌、ただ感慨無量でございませぬ。聖講習会の追憶、あの大広間の雰囲気、先生のみ教、なつかしい皆様方の真剣な求道態度、そうした追想は、またしてもグウタラな存在を続けている私の魂をぶつてぶつてぶちのめします。高慢なるわれの全体が、粉微塵に打ちこわされて、大地にひれ伏せられた聖一週間の追想は、ただ限りない懺悔と、限りない感謝を持ちます。感激のすべてを、感謝のすべてを、合掌こめて厚くお礼申し上げます。ご期待にそむかぬよう、できるかぎりを働かせて頂きます。団の真精神を念頭において。先生のいらつしやる日を楽しみに、お待ち申しております。」

この人あるか。われこの人を知る。しかしてこの人は、ただこの一人にはあらざるなり。

夜半静かに思いを各地の聖友の上に馳す。

「自動車の嫌いな私が珍しいことに酔いもせず、退屈も感じないで、いつの間にか当地へつきました。それは私の心の中へ、先生をはじめ講習員諸兄弟が入りかわり立ちかわりお見舞にお出で下さつて、ある方は策励し、ある方は慰藉し、ある方は冗談を言い、泣いたり、笑つたりしていましたから。」

これは慶沢和尚のお便りの一節であるが、けだし、禅師一人の心境にはあらざるべし。

「先生よ、慶沢はまた、道元の言葉をかりて、慶沢に言い聞かせねばなりません。何もつてのゆえに、慶沢はそうなつて居りませんから。」

かくのごとき卑賤の身命を持ちながら、あくまで如来の正法を聞かん。道にいかでか、この卑賤の身命を惜しむ心あらん。重く尊からんとも、なお法のためには身命を惜しむべからず。いわんや卑賤の身命をや。

惜しんで後、何物のためにか捨てんとする。

凡そおよ為法、為道のために惜しまず捨つることあらば、輪王よりも尊かるべし。上天よりも尊かるべし。凡そ天神地祇三界衆生よりも貴かるべし。

静かに思うべし。正法世に流布せざらむ時は、身命を正法のために放捨せんことを願うともあうべからず。正法にあう今日のわれらを願うべし。

正法にあうて身命を捨てざるわれらを憐れむ。恥ずべくはこの道理を恥ずべきなり。

仏祖の大恩を報謝せむことは一日の行持なり。自己の身命をかえりみることもなれ。

「諸仏の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。わが行持によりて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。」(道元)

われはまた、千草にすだく、幾十百とも知れぬ虫の音に耳を奪わる。

ああ。この微妙なる自然の樂の音よ。

鳴くは、もちろん松虫、鈴虫、くつわ虫等々に違いない。しかし、虫の音によつて秋を知る。

秋名告るなり、虫声を通して秋名告るなり。単なる虫の声にあらず。秋自らの声なり。

念仏はもちろん、衆生の上であり、されど、南無阿弥陀仏は如来の不行なり。

念仏とはただ、如来自らが衆生の上に名告りたもうにほかならず。

若人よ！ 秋の夜を沈黙せよ。しかして、読めよ、考えよ。

青年よ！ 秋の夜を思惟せよ。しかして、二十五歳にして哲人たれ。

若き日の幾年を、眠らず、食わずして学びたる心血の歴史を持たざる偉人あることなし。

秋は来る。若人よ、真剣なれ、汝自身の建設のために。